

小学校における英語音声指導の変容に関する事例研究

—英語に堪能な若手専科教師に焦点をあてて—

和田あずさ

1. 研究の背景と目的

小学校段階における英語教育において、英語音声指導は中核的な役割を担っていると考えられるが、小学校教師の多くは自らの発音と音声指導に不安を抱えていることが指摘されている（上斗・三宅・西尾、2017など）。一方で、現在小学校では、教職あるいは外国語の指導経験や英語運用能力が多様な教師が指導に携わっている。そのため、教師によって音声指導の取り組みやその背景にある教師の信念も異なると推測される。つまり、教師の授業実践とその背景にある心的過程を解釈する事例を集積することでできれば、教育現場での営みを深く理解するとともに、多様な文脈のもとで培われる実践知を導出することができると考えられる。

しかし、小学校英語教育に関する従来の研究の多くは、指導方法や教材の効果検証を目的としており、目の前の事象を深く理解しようとする理解志向の研究が極めて少ない傾向がある（本田・田所・星加・染谷、2020）。小学校教師を対象とした英語教育に関する教師の信念に関する研究に関しては、質問紙による調査（中村・長谷川・志村、2012など）や、個別の教師がおかれている状況や経験などが教師の信念にどのような影響を与えているのかについてのインタビュー調査（中村・志村、2011など）があるものの、これらの調査で導かれる教師の信念と実際の授業とのかかわりについては、十分に検討されていない。

以上のことから筆者は、公立小学校で外国語指導を担当する複数の教師の協力を得て、個々の教師が小学校における英語音声指導についてどのような信念を持っているのか、実際の授業において音声指導がどのように行われているのか、そしてこの二つはいかに相互に関連しているのか、などのことについて探求している。これまでの取り組みには、中学校英語科の教員免許を持つ大学卒業後1年目の小学校教師の事例、英語に苦手意識のある熟達期の小学校教師の事例、小学校教員免許と小学校での英語指導経験の両方を有する中堅段階の中学校英語科教師の事例、英語に堪能で小学校教師としての経験と言語教師としての経験に差がある小学校教師の事例などがある。これらの取り組みの一環として本研究では、和田（2021）と同一の教師（以下、授業者）を事例とし、この授業者の経年的な変容をとらえることを目的とする。

2. 研究方法

本研究の授業者は、中学校と高校の英語科教員免許を持ち、小学校の非常勤講師として高学年の外国語を担当して2年目となる教師である。授業者は学生当時から英語を意欲的に学んでおり、短期大学在学中にはニュージーランドに1ヶ月間、ハワイに3週間短期留学し、編入した4年制大学では1年間留学生寮で生活した。大学卒業後はアメリカの大学院に進学し、3年間、日本語・日本文化教育や第二言語習得論を学ぶ傍ら、ティーチングアシスタントとして日本語と英語で日本語を大学生に教え、大学院修了後もアメリカの大学と高等学校で日本語と日本文化を約7年間教えたという経歴を有している。そして帰国後の1年目は小学校と中学校の英語支援員と高等学校のプレゼンテーションの講座を不定期で担当し、翌年から小学校の外国語専科を担当している。

データの収集にあたっては、2020年10月から2021年3月にかけて、この授業者が担当する授業のうち、第5学年各2学級の授業を週1回、第6学年各2学級の授業を週2回観察した。観察の際には、ビデオでの録画、ICレコーダーでの録音、フィールドノーツの作成を行った。また、おおむね週1回、昼休みに、授業者の業務を妨げない範囲で授業に関する協同的な省察を行った。この省察は半構造化インタビューの形式をとり、ICレコーダーでの録音と簡易なメモの作成を行った。

以上のデータを検討するために、まず授業と省察の逐語録を作成した。逐語録は、内容のまとめりと話者の交代で分節化した。そのうえで、逐語録を何度も読み込み、言葉遣い、声色、口調などから、授業内での発言や省察のやり取りについての全体的な印象を捉えた。次に、授業の逐語録については、各アクティビティに関する指示や授業運営上の指導及び指示を除いた、音声に関する授業者の言葉かけを抽出し、指導の傾向と変容を捉えた。そして、授業と省察の逐語録を対照し、指導の変容に何らかの教師の信念がうかがえるかを検討した。このことに加え、省察の逐語録から暫定的なカテゴリーを作成した。以降は、生成されたカテゴリーのうち、省察の焦点として繰り返し言及された主題を導き出し、この主題が授業者から語られる契機となったエピソードと、このエピソードを通して省察がどのように変化していったかを考察する。

3. 分析と考察

まず、授業者が行った音声指導について分析と考察を行う。授業者の音声指導は、児童の英語による発話に

対するフィードバックとして行われていた。そのため、抽出した言葉かけから暫定的なカテゴリーを生成したのちに、Vigil & Oller (1976)、Lyster & Ranta (1997)、楊 (2006) などの研究で示された言語教育における教師のフィードバックに関する分類枠組みをもとに、カテゴリーの見直しを行った。これらを制したものが、以下の表である。

| 音声指導のカテゴリー | 発話の内容 | 授業者の発話例 |
|----------------|------------------------------------|---|
| 明示的な調音方法指導 | 分節音の調音方法を説明する。 | v から始まっているからちょっと舌かみまます。 |
| 明示的な韻律超分節的要素指導 | 強勢、音声変化、イントネーションなどの特徴を説明する | (指で下降を示しながら) thirty, (指で上昇を示しながら) thirteen。 |
| リキャスト | 適切な発音を提示する。 | (児童) Twenty. (授業者) Nice, twenties. |
| メタ言語的フィードバック | 誤りや修正の余地があることを伝える。 | bed じゃなくて? |
| 誘導 | 授業者が途中まで発音し、続きを正確に発音するように促す。 | thir...yes, thirtieth |
| 繰り返し | 誤りを上昇調で繰り返す。 | Twenty? |
| 強調 | <u>一部を強調して発音する。</u> | <u>temples (/z/を強調)</u> |
| 比喻 | 日本語の似た音や言葉で発音を印象づける。 | 静かにしての「シー」の音 |
| 文字と音のつながりの指摘 | <u>スペルに言及して発音を意識づける／音読させる。</u> | <u>a から始まっているから an やったね</u> |
| 感情面でのフィードバック | 称賛する、励ます、共感するなど、活動への取り組みを肯定的に評価する。 | ・いいですね。 ・(learn と run) 確かに似てる。 |

強調や文字を活用した指導を行った理由として授業者は、マスク着用のため口の動きが見えないこと、デジタル教科書はアニメーションで実際の口の動きが分からないことを挙げていた。そして、前年は口の動きに頼っていたと振り返り、音声的大事だと思うからいろいろな制限の中でどう指導ができるか試行錯誤してきた中で、口を見ないと児童はカタカナの音に頼るので大きめに発音し、それでも限界があるから文字を使うという指導に至ったと語っていた。また、文字を使うと一呼吸おいて考えられると語ったうえで、前年は自分に余裕がなく、止まったら授業の雰囲気が緩むと思っていたが、今は大丈夫と思えるという自身の変化にも言及していた。このように授業者は、自身も英語で堪能でありながら、自身が英語の音声のモデルを示し、その発音を児童に模倣させたり注意深く聞かせたりするというよりも、英語と日本語の音声の違いへの気づきを促す指導を行っている。

そして、このような授業者の英語音声指導における自身の役割を明確にした契機の一つとして、本研究では、第6学年での授業の中で行われた、英語での詩の朗読に関するエピソードに着目する。学級担任の意向により、第6学年では10月末から約3週間、峠三吉の詩である「にんげんをかえせ」を英語に訳したものを朗読する活動を行った。最初に英語版の詩を扱った際、第二言語としての英語話者であるALTの発音の中にカタカナ英語としてもなじみのある別の単語に聞こえるものがあったため、授業者は1回目に授業を行った学級ではALTに続いて児童と一緒に音読する際に紛らわしく聞こえた部分の本来の発音を強調し、2回目に授業を行った学級ではALTに発音の指摘を行った。この出来事のあとの省察で授業者は、何が正しく何が間違っているということではないという前提があったうえで、自身と前ALTと現ALTの発音はすべて違うが児童は聞いたまま発音することや、本来の単語とALTの発音によって聞こえた単語はどちらも児童にとってなじみのある言葉のため児童も迷ったのではないかと思ったこと、実際の児童の発話で両方の発音が聞こえたので児童が自信を持って詩を覚えるために指導や指摘をしたことなどについて言及した。一方で、そのあとの授業後の省察では、ALTが自分の発音のことを気にしており、判読することを遠慮しているのであれば申し訳ない、前に立つ先生には自信を持ってもらいたいとも語っていた。

この一連のエピソード以降、授業者は児童がモデルとするべき発音や、児童が目指すべき発音について、繰り返し省察で言及していた。三学期には、ALTと自身の立場や役割を改めて考えるようになったと語り、「児童がリピートするのはALTの発音であるべき」「ALTの英語がグローバル英語としての核となる」と、自身の明確な考

えを口にするようになった。また、このような ALT の役割に対する自身の立場についても、「ALT の発音と自分の発音が違っていても自分が正しい（と考えている）音を発音する」という姿勢の明確化、「児童が純粋に真似するからこそ自分も気をつけるし、発音や強勢を事前に確認するようになった」という自身の発音に対する見方の変化、「児童の学びをより良いものにする」と ALT と良好な信頼関係を築くことのバランスを考えないといけない」という同僚性などについての指摘をしながら、「自分の発音を真似させるのは違う、それは ALT の役割を一つ奪うことになる」「教師は『英語屋さん』でなくていい、英語が堪能でなくても ALT の良さを発揮させられることが大切」と明言していた。そして、児童の発音については、「最終的には児童が自分の英語、自分の発音でやり取りできてほしい」とし、『通じればいい』になると（それ以上）学ばなくなる、相手への思いやりは必要」との点をふまえたうえで、「日本人の英語を理解することを強要するわけではなく、世界共通語として分かってもらえる範囲の中でバリエーションは多様であるべき」という見方を示していた。

さらに、前年度の授業者の語りをふまえると、「児童は ALT 発音を模倣すべき」という考えそのものは、和田（2021）の段階においてもみられたものである。しかし、当時の授業者が頻繁に使用した「ネイティブ」という言葉を、本年度は使用しなくなった。その要因として最も大きなものは、現 ALT が英語母語話者ではないからであろう。それに加えて、アメリカ英語話者である前任の ALT と自身の発音が比較的近く、本年度ほど ALT や自分の発音に意識を払う必要がなかったのではないとも考えられる。

4. まとめ

本研究では、前年度における研究と同一の教師を事例とすることで、音声指導に関する教師の信念と実際の指導、そしてこれらの関係性がどのように変容するのかについて、経年的にとらえることを目的とした。音声指導の実態については、前年度から継続して取り入れられているものに加えて、「強調」や「文字への着目」などが重視されて取り入れられた。この背景には、新型コロナウイルス感染症の影響を踏まえた各種の制限がある中でできることを模索しながら、単にできることをするというだけでなく、その指導に自分なりの意味づけを加えていることがうかがえた。また、ALT の発音を聞いて真似することを重視する教師の信念は自体は大きく変容しなかったことが明らかになった。ただし、児童に話してほしい英語が「ネイティブの真似をする」から「（非英語母語話者も含めた）ALT の発音を真似する」「自分の英語を話す」などのように、国際共通語としての英語や理解可能な英語などへの変容がみられた。このことから、第二言語としての英語話者である ALT とのチームティーチングにより、自身の発音や児童に目指してほしい発音や、自身と ALT の役割に対する認識が再確認されたことが示唆された。今後は、データと照らし合わせながらカテゴリーの見直しと修正を行ったうえで、量的な点から授業者の変化をとらえるとともに、より詳細に記述と解釈を行うことが求められる。

5. 謝辞

本研究に協同的に参画してくださった研究協力校の先生方と児童の皆様にご心より御礼申し上げます。なお、本研究は JSPS 科研費 GA20K13134 の助成を受けたものです。

引用文献一覧

- 上斗晶代・三宅美鈴・西尾由里(2017). 「小学校英語活動に資する発音指導マニュアルの作成に向けて—英語発音指導の実態調査と教科書分析を基に—」『大学英語教育学会中国・四国支部研究紀要』14, 143-160.
- 中村香恵子・志村昭暢(2011). 「小学校教師における言語教師としての認知研究：小学校外国語活動に意欲的な教師の経験と学びから」『JACET 言語教師認知研究会研究収録』第1号, 58-72.
- 中村香恵子・長谷川聡・志村明暢(2012). 「小学校教師の成長段階における言語教師としての認知の特徴」『日本児童英語教育学会研究紀要』第31号, 99-114.
- 本田勝久・田所貴大・星加真実・染谷藤重(2020). 「小学校英語における研究動向：JES Journal のシステマティックレビュー」『JES Journal』20, 351-366.
- 楊帆(2006). 「誤用訂正に対する意識—中国人日本語学習者と中国人教師の場合—」『小出記念日本語教育研究会論文集』第14号, 37-49.
- 和田あずさ(2021). 「小学校における英語音声指導に関する事例研究—英語が堪能な教師の信念に焦点をあてて—」『JAILA JOURNAL』, 第7号, 79-90.
- Lyster, R., & Ranta, L. (1997). Corrective feedback and learner uptake: Negotiation of form in communicative classrooms. *Studies in Second Language Acquisition*, 20(1), 37-66.
- Vigil, N. A. and Oller, J. W. (1976). Rule fossilization: a tentative model. *Language Learning*, 26, 281-295.